

願心莊嚴の淨土

延 塚 知 道

親鸞は法然との値遇により、「ただ念仏」せよという教えにまで具体化した本願の歴史に参加することによって、そこに開顯された仏道が、大乘の仏道であることを『教行信証』で明らかにした。そこでは、淨土が大乘の仏道にふさわしい質を持つものとして明らかにされている。そして、それが『論』・『論註』の指南に依る所が大きいことから、以下『論』・『論註』に依って、淨土がどのように説かれているかを尋ねてみたい。

曇鸞は、『論註』冒頭に「五濁の世、無仏の時」という仏弟子の深い痛みと、「目に触るるに皆是なり」という現実の凝視とに依って、その現実のただ中に、本願の仏道が開顯されたことが説かれていた。

また、上巻末の八番問答では、われわれの求道心の根源に自我心が潜むことが、本願の唯除の文に依って言い当てられ、われわれの存在構造そのものが仏道に縁なき者として説かれている。

恐らく曇鸞は、釈尊の教えに依って釈尊のように成りたいという、これまでの仏道を支えてきた求道心に、人間の存在構造に由来する不純さを言い当てられた時、それがいかに真剣な求道心であらうとも、そこに求められる仏道は、人間の自我心によって必ず仏道ならざるものに変容していくことを知らされたのではなからうか。それは、人間の方から仏になるという仏道の放棄を意味すると同時に、凡夫のままに、仏の本願によって信じ続けられて

いるという仏道への転換でもある。それはまた、釈尊の悟りに根拠を置き、釈尊の悟りから仏道が始まるという仏道から、謗法なる者という自らの動かし難い存在の確かさがこそが、本願の仏道を開いていく根拠になるという転換があることが思われる。「五濁の世、無仏の時」という言葉が、単に仏弟子の悲しみにとどまるのではなく、深い現実の凝視によって「無仏の時」と言い切れた時、釈尊の悟りを根拠として始まる仏道から、「五濁の世、無仏の時」を「自力にして他力の持つ無」き者として生きる、あらゆる衆生のひとりひとりを根拠として、釈尊を仏たらしめていた本願の仏道が、そこに開顯されたことを意味するのであらう。恐らく、一点のごまかしのない現実のただ中で、一切の衆生のひとりひとりを契機として開かれる本願の仏道こそ、理としての仏教ではなく、実践の仏道として、また一人も、もらさないという大乘の仏道としての実質を持つこととなったに違いない。

曇鸞は、その仏道への讃歌こそ「世尊我一心 帰命尽十方 無尋光如来 願生安樂国」という天親の『願生偈』であることを、『論註』冒頭で明らかにしているのである。したがって、天親の説く二十九種莊嚴の淨土は、人間の力によって未来に願生すべき理想の国として説かれているのではなく、「五濁の世、無仏の時」という現実のただ中で、衆生に成就した本願力廻向の願生心に傾かれている本願の国土として説かれているのである。

曇鸞は、凡夫の願生心に働く淨土の働きを仏土不可思議として説き、その不可思議なる淨土の働きを、成就し住持していく力として願力と仏力とを見出し出している。そして、この願力と仏力とが不虛作住持功德にそのまま説かれている。

親鸞は『入出二門偈』で、この不虛作住持功德を、「彼の如来

の本願力を観ずるに、凡愚遇うて空しく過ぐる者なし」と、衆生の廻心の事実を成就せしめるものとして了解されている。よき人との値遇により広大なる本願の世界に帰入せしめられるという廻心の事實は、自らの求道心をはるかに超えた根源から、法蔵菩薩の願力に喚び覚まされ、自力の執心で無始以来仏に背き続けてきたものとして仏力に照されることにより、深い懺悔と共にその宿業の身を確かに自己とせしめられることである。この廻心の事実を成就せしめる願力と仏力こそ、不虛作住持功德に説かれる願力と仏力とのダイナミックな働き他にはなく、それがそのまま浄土の不可思議の徳用を、成就し住持していく力でもある。このように尋ねてくる時、浄土は、仏に背き続ける衆生にはどこまでも彼岸の世界としてありながら、しかも本願力の廻向成就した願生心に、確かに働き、領かれていると言わざるを得ないのでなかろうか。

曇鸞が自らの願生心の内に、「仏本何が故ぞ此の莊嚴を起したもう」と問い、浄土の二十九種莊嚴が展開されることに耳を傾ける時、「仏意測り難し、しかりと言えども竊かにこの心を推するに」と自らの信の内深くに問い、本願の世界を開いてきた親鸞の「三問答」を想起せしめられる。曇鸞が、衆生の不実なる姿を唯一の契機とし、願生心の内実として浄土が展開されたように、親鸞も「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし」と、そこでは衆生の実相が照し出されている。そこでは、親鸞の個性は限りなく破られ、本願によって自らが「一切の群生海」と喚ばれている。曇鸞も浄土莊嚴のいちいちに自らを衆生として見い出されているように、自力の執心によって仏に背き続け

てきたものとして、本願に呼び覚まされる時、初めて、共に宿業に喘ぐ者として、本願により無量の共なる衆生が与えられるのではなかろうか。この「出離の縁あることなき身」の相知こそ、救わずにはおかぬという法蔵菩薩の志願に感応することができ、唯一のものであり、われわれの迷いの深さと衆生海の広さこそが、願心に莊嚴される浄土の広大さを見開いてくる唯一の契機であろう。それは法蔵菩薩の願心に莊嚴された浄土であり、われわれの流転の身の相知を他にしては、浄土は何処にもない。より積極的に言う事が許されるならば、衆生の内に成就した願生心が、浄土を見出し浄土を莊嚴していくと言えないであらうか。

このように願生心に、われわれの畢竟の依り処として、浄土が限りなく莊嚴されると同時に、そこでは共に宿業に喘ぐ衆生が与えられるが故に、智慧によって生死に任せず、慈悲によって涅槃に住しないという、大乘の菩薩道が展開することとなる。願生道と言えども、「五濁の世、無仏の時」を自らの生きる場所とし、「無三宝の処に於いて、仏法僧宝の功德の大海を住持し莊嚴して」仏法の事業に参加していくという大乘の菩薩道の他にはないのでなかろうか。

このように願生すべき彼岸の世界と同時に、願生心の超越的根拠として、浄土の意義が尋ねられる時、大乘仏教にふさわしい質を持つものとして、『論』・『論註』から親鸞が読み取った浄土こそ、まさしくこの願心莊嚴の浄土であったのではなかろうか。